

特集

神仏習合とモダニティ

編集意図

編集委員会

明治政府によって断行された神仏分離政策は、日本の宗教史における最大の「事件」の一つであった。従って神仏分離に関しては、とくに第二次大戦以降に宗教学、歴史学から多くの重要な研究がなされてきた。だが奇妙なことに、従来の研究において神仏分離という事象が問われることがあっても、そもそも神仏習合とは何か、日本文化史において神仏習合はどのように位置づけられるのか、そしてなぜ近代国民国家は神仏習合を排除しようとしたのか、といった根本的な問いかけは棚上げされたままである。本特集は、神仏分離ではなく神仏習合そのものへの問いを発すること、明治以降に提出されてきた、モダンという枠内での宗教概念、宗教史そのものを再考する契機を模索するものである。

ここで、神仏習合そのものを議論の俎上に乗せるための視座を、取りあえず四点指摘してみたい。第一は、日本の宗教文化における神仏習合のポジションについてである。例えば黒田俊雄は、神仏習合を単なる神道と仏教のシンクレティズムとは見なさず、大乘仏教（顕密主義）の日本的展開と見なしている。単純なシンクレティズム論は神仏習合の本質を見落としてしまうが、現実のところ、それに代わるような議論は少ない。第二は、神仏習合への否定的思想の醸成という歴史的問題である。神仏分離は明治政府による政策と見なされがちだが、実際には江戸期

にも神仏分離は行われている。神仏習合の否定はこのように長期に亘る政治的現象であり、明治政府の政策はその最終段階と見なすことで、神仏習合と神仏分離を政治主体から相対化させる必要があるだろう。第三は、神仏習合の主体は誰であったのか、という問題である。従来の神仏分離に関する議論は、国家により強制的に改編を迫られた民衆の宗教的状況が神仏習合である、と見なす傾向がある。しかし、神仏習合思想は民衆の思想ではなくあくまで仏教思想であり、神仏分離の思想的背景となった国学自体が、エリート層ではなく中間層（上層農民や下級武士層）の思想と言えることから、神仏習合を短絡的に民衆思想と結びつけるのは危険であると言える。

そして第四が、明治政府Ⅱ近代国民国家はなぜ神仏習合思想を排除しなければならなかったのか、といった問題である。従来は、近代国民国家の象徴的イデオロギーとしての近代天皇制確立と関連させ、神仏分離は論じられてきた感が強い。しかし、神仏分離自体は江戸期に既に始まっており、神仏習合を忌み嫌ったのは近代的知とも言える思想背景をもつ知的エリート層であった。彼らは、なぜそれほど神仏習合を避けようとしたのであろうか。この問いを発することで、神仏習合／神仏分離という歴史文化的事象を単に近代天皇制といった狭い枠内から開放することが、そしてまた神仏習合という観点から日本のモダニティを相対化することが可能になると思われる。

上記の四点について言及することは、ある意味で日本の宗教文化、宗教史におけるモダニティを再考する契機となる。制度的な近代の創始から既に一三〇年以上が経過していながら、民俗的なレベルでは、神仏習合への民衆の希求は消滅したわけではなく、まだ民俗文化の中にそれを垣間見ることができ。モダニティが排除しようとした神仏習合思想、そして国家レベルでの否定があつたにも関わらず現在でも続く神仏習合への希求、この問題を解決しない限り、日本の宗教研究は民衆から乖離したまま、リアリティなきもので終わってしまうのではないだろうか。